

# ならずもの

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



オンドリがメンドリにいいました。

「もうクルミがうれる時期じきになったよ。どうだい、いつしよに山へいって、思いきり食べてこようじゃないか。まごまごしている  
と、リスのやつにみんなもっていかれちまうからね。」

「けっこうね。」

と、メンドリがこたえました。

「いきましたよ。ふたりでたのしんできましょうね。」

そこで、ふたりはいつしよに山へでかけました。とてもいいお  
天気でしたので、ふたりは夕がたまで山にいました。

ところがですよ、ふたりがあんまり腹はらいっぱい食べすぎたせい

か、それとも、高慢こうまんちきになってしまったためか、そのへんのところはよくわかりませんが、とにかく、ふたりとも歩いてかえるのがいやになってしまったのです。

そこで、オンドリがクルミのからで小さな車をこしらえることになりました。車ができあがりますと、メンドリはそのなかにすりわりこんで、オンドリにむかつていいました。

「おまえさん、車のまえにいつて、馬がわりにひっぱたらどうなのよ。」

「ふん、ありがたいこつた。」  
と、オンドリがいました。

「馬のかわりをするくらいなら、歩いてかえるほうがよっぽどい

いや。いやなこつた、それじゃ、まるで話がちがうもの。御者ぎよしやになつて、御者台にすわるんならべつだけど、じぶんでひつぱるなんてのはごめんだぜ。」

こんなふうに、ふたりがいいあらそつているところへ、カモがガアガアなきながらやつてきました。

「やい、どろぼうども。だれがきさまたちに、おれさまのクルミ山へはいれつていったんだ。待まつてろ。いまひどいめにあわしてやるからな。」

こういうがはやいか、カモはくちばしを大きくあけて、オンドリにつつかかつていきました。けれども、オンドリもまけてはいません。すばやく、カモのからだの上にぐんとおしかかつて、そ

のあげく、けづめでカモをむちやくちやにひつかいたものですから、とうとうカモもこうさんしてしまいました。ですから、その罰ばつとして、カモは車のまえにつながれて、車をひっぱることを承しょう知ちさせられました。

そこで、オンドリは御者台ぎよしやだいにすわって、御者になりすましました。さてそれから、オンドリはものすごいいきおいで、車をすつとばしていきました。

「カモ公こう、力ちからいっぱい走るんだぞ。」

こうして、しばらく走っていきますと、歩いているふたりのものにあいました。それはとめ針はりとぬい針はりでした。ふたりは、

「待まってくれえ、待まってくれえ。」

と、どなりました。そして、

「もうすぐくらくらなるだろう。そうすると、ぼくたちにはひと足も歩けないし、それに道もとつてもきたないんだ。ほんのすみっこでけっこうだから、車にのせてはもらえないかい。じつは、ふたりとも町の門のまえの仕立屋したてやの宿やどにいたんだけど、ビールをのんでいて、おそくなつちまつたんだよ。」

と、いいました。

このやせこけたひとたちなら、たいして場所ばしょもとりません。で、オンドリはふたりをのせてやりました。もつとも、そのまえに、ふたりとも、オンドリとメンドリの足をふまないという約束やくそくをさせられましたからね。

夜おそくなつて、みんなは、とある宿屋やどやにつきました。今夜はもうこれいじようさきへいく気はありませんし、それに、カモの足つきもあぶなくなつて、あつちへよろよろ、こつちへよろよろするありさまでしたから、みんなはここにとまることにしました。

やどや宿屋の主人しゆじんは、さいしよのうちは、

「てまえどもは、もういっぱいでして。」

などといつて、ことわろうとしました。それに、このれんちゆうが、たいしたお客きやくではなさそうにも思われたのです。けれども、そのうちにみんなが、

「くるとちゆうで、メンドリさんがたまごをうんだんだけど、そのたまごをあげますよ。」

「このカモは、まい日ひとつずつたまごをうむんですが、このカモもさしあげましょう。」

などと、さかんにうまいことをならべたてたものですから、とうとうしまいには、主人も、

「それじゃ、今夜はおとまりなさい。」  
と、いいました。

そこで、みんなはどんどんごちそうをはこばせて、大きわぎを  
しました。

あくる朝はやく、夜のあけがた、まだみんながぐっすりねむつ  
ているうちに、オンドリはメンドリをおこしました。そして、ま  
ずたまごをとりだして、からをつついて穴をあけ、その中身をふ  
あな  
なかみ

たりですっかりのんでしまいました。それから、からはかまどの上にほうりあげておきました。

つぎに、ふたりは、まだねむっているぬい針はりのところへいって、その頭をつまんで、主人しゅじんのいすのクッションにつきさしました。それから、とめ針はりのほうは、主人の手ぬぐいにさしておきました。こうしておいて、あとはどうにでもなれとばかり、ふたりは野原をとぶようにしてにげていってしまいました。

カモは野天のてんでねるほうがすきだったものですから、庭にわでねむっていたのですが、ニワトリたちがバタバタにげていく音に目をさしました。そして、すぐに小川を見つけて、川下へおよいでいききました。そのほうが、車なんかをひっぱるよりもずっとはやく

いけました。

それから二、三時間たったとき、宿屋やどやの主人しゅじんはようやく羽根はねぶとんからおきだして、顔をあらいました。さて、手ぬぐいで顔をふこうとしますと、とめ針はりがすうつと顔をこすって、おかげで右の耳から左の耳まで、赤いミミズばれができてしまいました。それから、こんどは、台だいどころ所へいって、タバコのパイプに火をつけようと思いました。それでかまどのそばまできますと、たまごのからがパチンとはねて、目のなかにとびこみました。

「けさは、いやに顔にたたるな。」

主人はこういって、むしやくしやして大きな安楽あんらくいすにこしをおろしました。ところがこしをおろしたとたん、いきなりとび

あがつて、

「うう、いたい。」

と、さげびました。

こんどは、ぬい針はりが、さつきよりもとひどく、おまけに頭でないところを、つきさしたのです。

主人はかんかんにおこつて、ゆうべあんなにおそくきたお客きやくたちがあやしいぞ、と思ひました。そこで、すぐさま立つていつて、さがしてみました。ところが、そのお客たちは、みんなもうでかけてしまったあとだったのです。

そこで、主人しゆじんは、ああいうならずものは、もうこれからは、けつしてとめてはやらないぞ、と、かたく心に思つたのでした。

なにしろ、あいつらときたら、さんざん飲<sup>の</sup>み食<sup>く</sup>いたあげく、一<sup>い</sup>  
ちもん 文<sup>もん</sup>もはらわず、おまけにそのお礼<sup>れい</sup>として、とんでもないいたず  
らをやらかすんですからね。



# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# ならずもの グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 矢崎源九郎訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>